

# ド・ゴールの未完の回想録における偉大さ への意志について

有 田 英 也

フランス第5共和制の初代大統領ド・ゴール (Gaulle, Charles de 1890-1970) は、後世にふたつの精神的遺産をのこした。それはナショナリズムの一形式としてのゴリズムと、二編の回想録である。

回想録には、主として第二次世界大戦を回顧した『戦争の回想』(1954-1959) と、第5共和国の誕生からアルジェリア戦争終結までを語る未完の『希望の回想』(1970-1971) がある<sup>1)</sup>。後者のうち第1巻「再生」は著者が生前に公刊した。第2巻「努力」は没後に、タイプ原稿にド・ゴール自身が手を入れた第2章までが、それまでと同様にブロン書店から出版された<sup>2)</sup>。古典的形式を愛したド・ゴールは、前作と同じ三部構成にするつもりだったが、急逝して果たせなかった。マルローはド・ゴールの死後に発表した1969年末の会見記『倒された樫の木』に、「わたしは1958年から1962年までの『回想録』を書いている。あと2巻になるだろう<sup>3)</sup>」というド・ゴールの言葉を記している。

本論は、この未完の回想録のうち、著者自身が公刊した第1巻を対象に、「作家」ド・ゴールの意図したものを、そのレトリックと話法に探ってゆく。

## 1 回想録というジャンル

ド・ゴールの回想録はふたつとも題に *Mémoires* という語を持っている。最初の *Mémoires de guerre* は「戦争の回想」、次の *Mémoires d'espoir* は「希望の回想」と訳せる。回想録というジャンルは、それが必ずしも職業的作家によって書かれず、むしろ政治家や企業人、芸能人らが書くという点で、また実際に文章を執筆しないまでも原稿を整理し修正する

人物が、公に、もしくはゴーストライターとして協力することもありうるといって特異といえる。それは回想録が、年代記や歴史上の人物の言行録のように、実用的意図から生まれ、その実用性を保ちつづけているからであろう。フランス文学で年代記作家 *mémorialiste* の代表格であるサン＝シモン公爵が、後にシャトブリアンやブルーストが範とする作品を執筆したのは、軍務の後に宮廷で政争に加わった著者が、頼みとしたブルゴーニュ公（1712年没）と摂政（オルレアン公フィリップ、1723年没）を失って城館にこもってからのことである。作品は第一級の文学と評されているが、ルイ14世親政の末期からルイ15世の摂政時代の年代記であるとともに、辛辣な人物評でも知られる。年代記と肖像はいわゆる実録であって、しばしば明確な意図、すなわち後世に実像を伝える意志を帯びる。そこに自己を正当化し、他人を中傷する筆遣いがあったとしても、むしろそれは「かくかくであったと伝えたい」という意志の、まぎれもない徴と読むべきであろう。この正当化への意志を「事実への意志」と呼ぶなら、回想録作家、つまり回想録を書こうとする人間には、「表現への意志」も見出される。ド・ゴール最晩年の回想録において、ふたつの意志はどのようにあらわれているのだろうか。

注目しておかねばならないのは、シャルル・ド・ゴールが生涯で三度の逆境を経験したことである。その次第は後述するが、手短かに記せば、第二次世界大戦でドイツ軍がパリを占領した時、ボルドーに避難した政府で抗戦派閣僚（国防次官補）だった彼は、ロンドンに亡命して、休戦派が作った対独協力政府と徹底的に戦った。これが第一の逆境とそこからの再起である。次に、第4共和制下で首相となったド・ゴールは政争に敗れて下野した。これが第二の逆境である。最後に、アルジェリア問題を契機に政界復帰を遂げ、第5共和国初代大統領としてその後10年にわたって国政を担ったド・ゴールは、国民投票に敗れて即日辞任してから第三の逆境に陥り、再起しないまま病没した。二編の回想録は、それぞれ二度目と三度目の逆境で執筆された。事実への意志は、執筆時の政治権力に対する不信と、みずからの再起への強い確信に裏打ちされている。

次に、著者63歳の作品である最初の回想録第1巻ですでに、語り手は、そこに書かれているように歴史を思い描いてくれる読者の出現を、後世に俟っている。ド・ゴールの好んだ緩叙法を用いるなら、「それは明日

のことではない」と書いて、「かなり先の将来になるだろう」と読ませるのである。後述する独特の時制が『希望の回想』の語りに用いられ、ド・ゴールの表現への意志を形づくる。

最後に、ド・ゴールのもうひとつの精神的遺産であるゴーリズムにも触れておかねばなるまい。米国の政治学者スタンレイ・ホフマンは、ド・ゴールの最初の回想録を論じた1960年の文章で、「偉大さ」が「ド・ゴールの思想の中心概念をなす」と評し、「偉大さは、世界において受動的な態度に甘んじることの拒否である」と定義した<sup>4)</sup>。軍人であったド・ゴールはフランスが受動的でなくなるためには手段を選ばず、政治原則を柔軟に扱いつつ進んだ。1945年にはソ連と結んで米英に対抗し、その後はソ連軍の脅威を訴えて勢力を伸ばし、1950年代初頭には欧州防衛共同体（CED）の枠内でのドイツ再軍備に反対するため共産党に接近しさえした。後述する植民地問題を解決する手法も、ひたすら現実主義を旨とした。

このフランス第一主義を日和見主義と冷笑されないようにするには、指導者に一種の「偉大さ」が求められる。だからこそ、ゴーリズムとは国家の擬人化と個人の国家化ないし神格化が、ド・ゴールの政治行動、特に言語表現において典型的に表れたものなのである。ゴーリズムは、逆境で書かれ、事実への意志が際立つ回想録の根幹をなす。回想録の主役は、二作のいずれにおいてもド・ゴール自身であり、かつフランスである。この力技は偉大さへの意志によって現れ、歴史と格闘して価値を試される。『希望の回想』の、単純未来で書かれた次の一節が、偉大であろうとする個人と国家の意志をよく表現している。

「つまり、いたるところで凡庸さ（*médiocrité*）から懇請される時代にあつて、わたしは偉大さ（*grandeur*）のために行動せねばなるまい<sup>5)</sup>」

ゴーリズムは、逆境から復帰したド・ゴールが、まさに彼の名において進めた諸政策によって特徴づけられる。それは超大国とはいえないフランスを、中級国にすぎないと決定づけた世界史的状况に、*nation*（国民、民族）として対応したものに他ならない。ド・ゴールが政治家として対処しなくてはならなかった現実とは何だろうか。

まず、第二次世界大戦の緒戦で、和平派はイギリスの降伏を見越してヒトラー・ドイツに休戦を申し出た。1940年6月17日、ラジオ演説で休戦への理解を求めた首相ベタンに対して、ド・ゴールは翌日6月18日、

BBCを通じて徹底抗戦を呼びかけ、ロンドンに自由フランス委員会を作った。これは個人が国家を代表しなくてはならない例外的な状況である。次に戦後のド・ゴールは議会戦略に疲弊して下野し、「砂漠行」と言われる苦境を経て、アルジェリアで起きた反乱を梃子に政権復帰し、アフリカ植民地の独立に直面した。彼は精力的に世界各地の植民地に赴き、抗独レジスタンスが植民地の奪回によって巻き返した歴史を強調しながら、独立後の新興国をフランス共同体につなぎとめようとした。ド・ゴールは、フランスがもはや列強でも植民帝国でもない中級国であるという現実を、国民に知らしめたうえで、あらためて矜持を取り戻させようとしたが、その政治はゴリズムを体現する一連の手法を伴った。これを内政と外交において見よう。二度目の逆境から政界復帰したド・ゴールが、大統領権限を強め、議会政党の力を相対的に弱めた第5共和制憲法を作ったのも、頻繁に国民投票を行って、国民議会ではなく民衆の信託を得ようとしたのも、ゴリズムの特徴である人民主権をよく表している。対外的には、二度目の逆境に至る対立のプロセスでド・ゴールは欧州防衛共同体（CED）構想に反対し、フランス軍の指揮権に強いこだわりを見せた。大統領になってからはイギリスのEEC（ヨーロッパ経済共同体）加盟に反対しつづけた。前者はフランス第一主義と言われるものであり、後者は宿敵イングランドへの敵意さえ感じられる。もっともゴリズムの特徴が顕わになったのは軍事であろう。植民地を独立させたド・ゴールは、後に『希望の回想』で「国民的野心をどこかよそに向けてやらねばならない」〔950〕と書くように、フランスの核武装路線を堅持した。フランスは1960年2月13日、サハラで原爆実験を行い、1966年9月11日には南太平洋のムルロア環礁で核実験に成功した。このかん1966年3月7日にはNATO（北大西洋条約機構）の軍事機構から脱退した。これらの政策は、英米に対して自由であろうとし、また政敵である共産党の背後に見据えたソ連に対抗するナショナリズムの現われといえる。

ふたつの回想録は自伝ではない。フランスの運命を担うべく「偉大さのために行動」した人物について、その人の生涯ではなく、まさに彼が偉大たらんとし、偉大たりえた時期を切り取って語る。だから、『希望の回想』には、ド・ゴールの人柄を伝える次のような一節は見られない。「ただ一人、わたしの国際的なライヴァルはタンタン〔エルジェの漫画

の主人公] だよ。わたしらは巨漢にいいようにされまいとするチビ助だ。人はそれに気づかないのだよ、わたしの背丈のせいだね」<sup>6)</sup>

これは文化大臣として仕えた作家アンドレ・マルローが、第三の逆境にあるド・ゴールをコロンベールの自宅に訪ねたときに聞いた言葉である。だが、ゴリズムの対外政策から人気漫画の私立探偵を思いつくのは難しい。事実、マルローも、『回想録』にシャルルはいない<sup>7)</sup>と書いている。たとえ中級国であってもその国民を格下げしようとする力（「凡庸さ」）に抗して見出されるのが、この偉大さなのであるから、それはどのような国民あるいは民族にも手の届くナショナリズムであるはずだが、ただ一人の人物に結びつけられることでゴリズムはフランス独自のものとなる。回想録の主役はフランスでありかつド・ゴール、それも歴史上の偉人としてのド・ゴール將軍なのである。

## 2 ド・ゴール將軍の復帰

ナショナリズムの一形式ゴリズムは国民の支持を失えば失速する。逆境は、三回ともまさにこうして訪れた。それが執筆の動機となって、後世の民衆に語りかける回想記作家が二度にわたって生まれた。『希望の回想』の分析に入る前に、最初の回想録における民衆の位置づけを確かめておこう。

『戦争の回想』の描く1940年から1944年まで、フランス国民は対独協力政権と占領軍によって、ド・ゴールへの支持表明そのものを封じられていた。それが第一の逆境の背景となる。だから、ド・ゴールは第1巻「呼びかけ」で、1940年6月18日のラジオ演説、「フランス国民への呼びかけ」を語る。第2巻「団結」は、レジスタンス諸派の団結であるとともに、休戦条約で「中立地域」とされヴィシー対独協力政権の統治下にあった植民地の奪回、アルジェのジロー將軍との確執を経て、連合軍のノルマンディー上陸後に臨時政府を樹立する一連の動きでもある。ド・ゴールはみずからの声を傾聴する民を見出した。第3巻「救済」は、国民意識の覚醒と勝利に宗教的意味を与える。「呼びかけ Appel」からして、旧約の預言者が神に選ばれる「召命」を思わせる。最初の逆境からド・ゴールとフランスを救ったのがゴリズムだった。

このようなゴリズムは、議会での駆け引きに巻きこまれ、また小党

分立を必然的にもたらず第4共和国憲法に縛られて、坂道を駆け下りるように退潮する。1946年1月20日、憲法改正で社共両党と衝突したド・ゴールは、軍事公債をめぐる社会党と対立すると首相を辞任してしまう。だが、彼は同年6月にバイユーで行った演説で、議会政治を批判して新憲法の骨子を示し、さらに翌1947年4月、みずからフランス人民連合（RPF）を結党する。同党は市町村議会選挙で圧勝した。だが、ド・ゴールは国民議会での政争に敗れ、1954年5月、RPFの議会内および選挙での活動を停止する。これは実質的な政界引退であり、この第二の逆境の中で『戦争の回想』が書かれる。回想録で第一の逆境からの脱出を描いたド・ゴールは、第二の政界復帰を見越している。さらに、『希望の回想』は、この二度目の政権獲得を「即位 *avènement*」とさえ呼ぶだろう。

1958年の政権獲得は一般に「ド・ゴールの復帰」と言われる<sup>8)</sup>。当時のフランス政府は連立与党の足並みがそろわず、とりわけ植民地の独立運動に及び腰だった。4月15日から首相が空位のままの本国政府に業を煮やしたアルジェリアで、極右と軍部が5月13日、反乱を起こして公共治安委員会を設立した。これがド・ゴール復帰の条件となった。アルジェ公共治安委員会は、前年に都市部ゲリラを掃討した「アルジェの戦い」でパラシュート部隊を率いたマシュー將軍を戴き、コルシカにも反乱を波及させた。その頃、ド・ゴールは、ようやく5月14日夜に首相に就任したピエール・フリムランを尻目に、翌日5月15日に出馬用意があると表明し、6月1日、共和国大統領コティから首相指名を勝ち取った。ところが、『希望の回想』は、これを十数年に及ぶ必然的過程として説明しようとする。回想記作家の正当化への欲求が際立つ第1巻「再生」冒頭の記述に注目しよう。

レジスタンス勢力を結集した臨時政府首班ド・ゴールは、憲法制定国民議会を開くために国民議会議員の選挙を行い、みずからは1945年11月6日に辞職した。新しい国民議会は同年11月14日、改めてド・ゴールを首相に選んだ。おそらくこれが通例の歴史叙述だが、前述のように、この第4共和制憲法の改正をめぐる意見対立を背景に、ド・ゴールは翌1946年1月20日に首相を辞した。この二度目の首相辞任を、23年後、三度目の逆境にあった1969年のド・ゴールは、次のように回想する。「しかし、わたしはその後を見越して、国民議会議員が選出される前に、

国民投票制度を創設し、以後は憲法が効力を有するには人民が直接に是認することを要す、と人民によって決定させ、そのことで、いま政党によって政党のために作られつつある悪しき憲法に代わる良き憲法を、わたし自身が基礎づける民主的手段を講じたのだった」〔885〕

この一節にはやや詳しい説明が必要だろう。辞職したド・ゴール不在のもとで国民議会が作成した憲法草案で、大統領は首相指名権を持たず、象徴的存在にされていた。この草案は1946年10月に国民投票で否決された。第二次草案では、大統領の首相指名権が復活したが、国民投票の結果は賛成53パーセント、棄権率は三分の一、つまりド・ゴールのいう「人民が直接に是認」したとは明言しにくい憲法体制が始まったのである。おそらく、連立与党のひとつMRP（カトリック系のレジスタンス組織を基礎とする人民共和運動）の支持者が、ド・ゴールの草案批判を受けて棄権したのだと思われる。

回想録作家の荒業は、この技術的な側面を、体制そのものの傷として描き出したことである。ド・ゴールは1958年に、首相になる用意があると公言して実際になり、大統領権限を強化した新憲法の案を自分で作って国民投票で問い（9月28日）、さらに新しい共和制で最初の大統領になった（12月21日）。回想録作家は、その経緯を、あたかも臨時政府時代に貫き通せなかった意志が、変化した国民によって受け入れられたと正当化している。自分を逆境に追いやった政党政治は、自分の辞職後の12年間に首相の座に就いた24人の名を列挙することで、不安定きわまる不自然な体制と印象づけられる。そして、「わたし」は俳優として造形される。

「だが、わたしは潮時を選ばねばならない。影絵芝居を終わらせて、わたしが機械の神を出させる時を、言い換えれば、わたしが舞台上上がる時を、である」〔894-895〕。

引用文中の「機械の神」とは、芝居で難局を一気に覆す超自然的な力を意味する。何よりも政権復帰そのものが、きわめて芝居がかっていた。

5月15日の出馬用意を語る『希望の回想』の一節は、実際の声明から言葉を借りて「恐るべき不幸の元凶たる国家の墮落」「政党体制の責任」を批判しつつ、「ふたたび共和国の権力を担うことで——わたしにはその用意がある——諸悪に対処するという意志」〔897〕を表明した、と回想する。みづからが第4共和制で最後の首相に選ばれたことには、この

ような論理必然性があったのだ、と。だが、ド・ゴールは選挙の結果、首相になったのではない。「コティ大統領が国民議会でド・ゴール將軍の復帰への反対を止めさせたとき、彼はいまだ存在しなかった第16条<sup>9)</sup>を予告して内戦を回避したのだった」〔906〕。回想記の語る「現在」は、政権獲得からの回顧的展望のうちに、「予告」と捉え直されている。

さらに、ここには「ド・ゴール將軍」という過去に結びついた呼称がある。『希望の回想』は引用箇所のおすぐ前でコティとド・ゴールの会談の模様を語る。ド・ゴールは1940年6月に第3共和国大統領ブルランが、「公権力とともにアルジェに移る代わりに、ペタン元帥に〔首相就任を〕要請し、そうすることで破局に道を開いてしまった」〔906〕と批判した。回想録作家の語る「ド・ゴール將軍の復帰」とはまさに、「6月18日の男」の「再登場」なのである。語りの現在は、過去の偉大さと近い将来に「予告」される未来の偉大さによって高貴なものとする。偉大さにふさわしい語り口が求められるからである。

シャルル・ド・ゴールは没落貴族の家庭に生まれた職業軍人である。彼は危難にあるフランスと自己を一体化させ、自分自身（回想記の「わたし」）を一個の客観的人物とした。すでに『戦争の回想』の語り手は、カエサルの『ガリア戦記』を思わせる三人称で、自身をド・ゴール將軍と呼んでいた。『希望の回想』では、1940年ほど英雄的ではない時代、「凡庸さから懇請される時代」において、「ド・ゴール將軍」の復帰=再登場を自作自演しなくてはならない。「ここにわたしは、かつてないほどあのド・ゴールとなるべく強いられている（*Me voici, obligé autant que jamais d'être ce de Gaulle*）」〔904〕。人はド・ゴールに生まれ、ド・ゴールになるのである。

回想録作家は、1958年の自己を、1940年の神話的人物に高める責務を負った。このド・ゴールとは、「内外で起こることがすべてその人の責となり、彼の片言隻句、一挙手一投足、それも誤って他人から彼の言動とされたものまでもが、行く先々であらゆる解釈を生みつつ議論され、どこでも激しい怒号の中心に居るしかない人物のことなのだ」〔904-5〕

回想録はこのような人物について、「首長の卓越した威厳、従者の重き鎖」〔905〕と述べて、為政者の職務を、国民に対する命令権と奉仕とに切り分けている。ダモクレスに至高権の何たるかを教えた王のような一節である。前述の「即位」は、このような神話的人物においてははじめ



て適切な比喩となる。即位した将軍、それは事実としてではなく、そのように事実を見たがる民衆の眼を通して語られ、後世に伝えられる。「自分たち〔アルジェリア人〕の希望によって背後から輝くフランスの、目に見える代表者になってほしかったド・ゴール将軍が、ついに即位したからには、新時代が開かれるかに思われた」〔916〕

この箇所で不定冠詞のついた「フランス」は神話・伝説を描く歴史物語の寓意的人物と解釈できる。植民地制度を正当化する1920年代の図像に見られる構図だが、さまざまな民族衣装をつけた人物たちの前に、後光が射しているマリアンヌ（共和国の女神）が置かれたようなものである。ただ、ここでは後光は植民地現地人の希望から生じている。回想録作家によれば、植民地住民は彼らを支配下にとどめたがるフランス人と、そうでない、たとえばフランス軍の将兵を区別しており、「おのずと人間的で、歴史的に寛容な国民に愛着を抱いていた」〔916〕。この家父長的な植民地観が、ド・ゴールなきゴーリズムのもっとも長命で、もっとも批判される部分であるのは言うまでもない。ニューカレドニアの独立運動に断固として反対した1980年代のベルナル・ポンスも、公共放送での英語使用を制限しようとした1990年代のジャック・トゥーボンも、自他ともに認めるゴーリストである。首相就任直後にアルジェで演説したド・ゴールは、「今度は誰もが、権威にあふれ、寛容そのものに語っているのがフランスだと理解している。（中略）問題を解決する義務と権利を有するのはド・ゴールだと、誰もが感じている」〔921〕というふうに、植民地住民と為政者の関係を「威厳と鎖」のごとくに語り、宗主国の義務と権利を正当化した。

ド・ゴールが政権に復帰した直後に、これをファシズムと断じた文学者がいる。まず、ロラン・バルトは最初の回想録が批評家から好意的に迎えられたのを問題視した。「ファシズムに傾斜している疑い」が、ド・ゴールが政治家でなく作家とみなされて見えにくくなり、「とりわけリベラルなゴーリズムが安堵した」と揶揄している<sup>10)</sup>。この評論は『フランス・オブセルヴァトゥール』紙に発表されたが、同紙で文芸批評をしたこともある小説家ベルナル・フランク（同名の日本文化研究者とは別人）は、1958年に著した対独協力作家ドリュ・ラ・ロシエルの評伝の末尾に、「<ファシズムはここを通さないぞ>と、人々は早口で分かりにくく言うが、ファシズムはすでに玉座にあるではないか」と、「い

ま、ここ」のファシズムを、それをゴーリズムだとは名指さずに批判した<sup>11)</sup>。

植民地問題の過熱によって復帰したド・ゴールの正当化欲求、本論でいう「事実への意志」は、植民地制度という事実の正当化にまで至る。そこでも神話的呼称が現れる。首相となったド・ゴールの仕事は、植民地のリーダーたちを説得して、独立後もフランス共同体の枠に留まらせることにあった。「総じて、これらアフリカ諸民族と、あのマダガスカル国民は、フランスが彼らを植民地化することで、良きにつけ悪きにつけ、現代のあらゆる天分に開いていたのだが、それほど動揺せずに人間的自由と国家主権に到達する。おそらく、ド・ゴール将軍が彼らの国家元首と結ぶ友好的関係がそこで何ほどかの意味を持っている」〔938-939〕。友好関係を結ぶのが「わたし」でなく神話的人物であるのは、アルジェリア人が自分たちの希望を就任したての首相に見出そうとしたのと同じである。一介の首相は、あの将軍にならねばならない。

### 3 民の声

それゆえ回想記の語りには独特の時制が用いられる。「再生」第2章「海外領土」を例にとろう。プレイヤッド版で40ページほどの叙述には、主として次の3種類の時制が用いられる。現在形を基調とする語りでは、語り手は当事者として精彩を放つ語りを行う。半過去形を基調とする部分は回想の口調となり、後に実現される事態と対比される。そして、単純過去を基調とする語りは、過去を歴史叙述として再現し、歴史上の人物であるド・ゴール将軍が定位される。

「フランスの指揮権をふたたび得たわたしは、帝国が課していた、もはや見返りのない束縛から国を解放とうと決意していた」〔910〕という一節で始まる第2章は、最初の10ページで半過去が基調となり、それ以降に生じることは時制の一致を受けて条件法現在で書かれる。植民地の放棄という大きな決断は、回想録作家にとって所与であった。「それでアルジェリアは？」〔913〕と半畳を入れた語り手は、「アルジェリアは地方の悲劇（drame）であるとともにフランスの悲劇でもある」と大げさに述べた後で半過去基調に戻り、他の植民地とは異なりフランスの三県であったアルジェリアについて、実に老獪な見方を示す。すなわち、

「フランスのアルジェリア」という独立反対派のスローガンを、「破滅的なユートピア」と切り捨て、アルジェリアは「ガリア時代からフランスが常にいくらかローマ的でありつづけたように、かつてフランスから受けとり、保持を望むはずのある種の刻印のおかげで、多くの点でフランス的でありつづけるだろう」〔918〕と楽観する。アルジェリア人に独立を与え、それゆえ非合法活動家から暗殺されかけたド・ゴールは、交渉して選び取った政治的決断を所与のものと描き、希望的推測を加えている。

この叙法の例外も、歴史的名称と無縁でない。単純過去で明瞭に描かれた次の情景は、まさに回想録作家が後世に伝えたい過去である。「サラン [将軍] らがおおっぴらに<ド・ゴール万歳>と叫ぶや、これまでは前夜にいたるまでけっして自発的にそうしなかったムスリムたちも、フランス人に混じって唱和したのだ」〔916〕

アルジェリアを初めとするアフリカ諸国との交渉の顛末は、一転して現在形で叙述される。「6月4日、わたしは政権を握るやいなや、アルジェに飛ぶ」〔919〕。もっともフランスに敵対したのは、「全体主義的共和国」の「若く優秀な野心家」、ギニアのセク・トゥーレだった。「わたしは落ち着いて、明瞭にこう答える。フランスはギニアに多くのことをしてきた。その輝かしい証拠が、たとえばわたしがたった今拝聴した演説家が見事なフランス語を話したことだ、と」〔926-927〕。新憲法の是非を問うた国民投票の結果は、「ギニアを除き、黒人アフリカの全地域とマダガスカルが、95パーセントを超える大多数をもって<ウイ>を投じる。12月には、わたし自身が [フランス] 共同体の大統領に選出されるさいに、同じ数字に到達する」〔928-929〕と、経過を追うように叙述される。

だが、アルジェリアについて語りだすと、叙述はさまざまな過去時制を取り混ぜて、複雑な事態を立体的に描く。アルジェリアの自治権を拡大し、公共サービスに従事するアラブ人とカビリア人の比率を合わせて1割に引き上げる改善計画が実行される一方で、本国では「左翼と名乗っていた人々が、理由こそさまざまだったが、賞賛を控え、共産党はド・ゴールが戦争を終わらせたがっていることを断固否定していた」〔933〕からである。単純過去は、交渉の経過で歴史的な意味を持ちそうな部分に使われる。「わたし」は、間もなくアルジェリア共和国臨時政

府を名乗る組織を率いていたフェルハット・アッパーズ<sup>12)</sup>と連絡していたアブドル・ラーマン・ファレスに、「国務大臣として政権に加わるよう提案した」[931]。だが、ファレスは「<何人かの意見を聞くまで>回答を留保した」。「スイスに赴き、二週間して戻ってきた。それは、提案は非常に名誉だと感じているが、受諾はできないと言うためだった」。このように、後世に伝えるべき挿話が、文学に特有の単純過去時制によって浮き彫りにされている。

「1959年および1960年を通じて、アフリカとマダガスカル地域は国家として組織されるようになる」[934]。フランスの首相、後に大統領の役目は新興国のつなぎとめにあつたから、「わたしは周囲に集まった元首たちに、かつてエマイオスの巡礼たちが旅人に言ったように、《わたしたちと共に残ってください。はや日も暮れました云々》と言う」[936]。ここで復活したキリスト（旅人）に見立てられているのはアフリカの為政者たちである。また、このあたりの叙述は外交辞令の見本市のように、「砂漠とサバンナが結ばれる彼の国に似て、遠くを見る眼と実際的感覚とを結合させる術を知っている」[939]とニジュールの首長を、「貧しい土地から、国を富ませる鉱物を引き出す巧緻」を備えているとモーリタニアの首長を称えることもある。この齒の浮くような叙述の真意が、やがて内向した語り手によって明かされる。「だが、目的を達するために、どれだけの道のりを踏破すべきだろうか！しかもわたしは一步ずつやらねばならないのだ」[939]。このように、いまだド・ゴール将軍になりえていない為政者の焦燥を、現在形がつかみ出す。

そして、現在と過去が混合する叙述が、事件から戦争に移行していたアルジェリア問題に即して用いられる。回想録作家が他者の言葉を直接話法で語る次の部分に、論述と歴史叙述の交錯が見られる。他者とはムスリムであり、アラブ人である。山間部のカビリア地方を訪れたとき、共同住宅に入ると歓声が上がり、学校では子どもたちがラ・マルセイエーズを歌った。だが、帰りぎわ、「ムスリムの役場書記」が「わたしを立ち止まらせ、身をかがめて震える声で呟いたものだ。<將軍閣下、騙されてはいけません！ここでは誰もが独立を望んでいます>と」[942-943]。そして、逮捕されフランス軍に帰順した現地人からなる「ジョルジュ部隊」のある若い医師は、「わたし」から「先生、あなたの考えは？」と尋ねられて、「わたしたちの願いは、自分自身で責任を持つこ

とであって、他人がわたしたちの責任を持ってくれることではありません」と答えた。だが、回想録作家は、「彼は眼を涙で濡らしてわたしに答えた」と単純過去で補足している。

逆に、単純過去で語られるべき歴史の日付を持った事件が、未来から回顧して納得されるように半過去形で叙述される。

「1959年9月16日、フランスはわたしの声によって、アルジェリア人にアルジェリアの運命を戻すという意図を予告していたのだった」〔944〕。たたみかけるように、やはり半過去形で、「決定的な一歩が踏み出されていたのだった」〔945〕とある。1959年9月16日の声明以降、ド・ゴールは1960年11月4日の声明を経て明らかにした「アルジェリア人のアルジェリア」によって内外の批判を浴びる。それでもド・ゴールは、共産主義者、FLN、守旧派（「フランスのアルジェリア戦線」など）、アルジェリアの公務員ストに攻められながら、「(民族)自決」を実現するための国民投票（1961年1月6-8日）を準備する。このような未来から振り返って、回想記作家は半過去で、「踏み出されていたのだった」と述べて、まだそれほど多くの人が気づいてはいなかったと暗示したのである。

歴史と遭遇した「わたし」は、ド・ゴール将軍となって国民を導く義務を痛切に感じる。「再生」第2章の最終パラグラフは、『戦争の回想』が一種の「召命」の結果であったような意味で、神慮を語る。「この肝要事の指揮を運命はわたしに託そうと欲している」〔950〕。「かつては栄光に満ちていたが、今では破滅的な植民地支配を、わたしは熟慮の末にやめさせるのだ。わたしは大きな骨折りをして、国民的野心をどこかよそに向けてやらねばならない」。この運命に気づくとき、「わたし」はもうひとりの役者フランスとともに、この回想録の主演となる。「この役目を、フランスがわたしに成就するよう呼びかけていると感じる。わたしは民衆がわたしの言うことに耳を傾けると信じる。機が熟せば、わたしは民衆に、わたしを是認するかどうか尋ねるだろう。そのとき、わたしにとって、その声は神の声となるだろう」。民の声は神の声(Vox populi vox Dei)、それは反議会主義的なナショナリズムの神話的原則である。

#### 4 民の声の両義性

回想録作家は、この原則によって立つ決意を、「わたしは二度の重要不可欠な契機に、もはや変更できないものを作り出すため、民衆にわたしの決断を、打算、困惑、妥協を超えて是認するよう呼びかけるだろう」〔952〕。これは前述したアルジェリアの「民族自決」を期す国民投票（1961年1月6-8日）と、戦争を終結させるエヴィアン協定の批准のための国民投票（1962年4月8日）のことである。民衆は為政者が働きかける客体でもあった。この強気には、すくなくとも回想録の叙述に沿うなら根拠があった。最初のアルジェでの演説のさいには、「ムスリムたちは（中略）わたしの人格が彼らに惹起する敬意と希望を隠していないが、依然として心の奥底に押さえ込んでいる」〔921〕と、民の声はまだはっきり聞き取れなかった。それが1959年9月16日にラジオとテレビで放映された演説で民族自決を容認すると、「ムスリム大衆は明らかに、ド・ゴール將軍からなら正義と平和を期待できるという感情を強くしている」〔951〕と感じられ、また、「フランス〔本国〕では、首尾よく解決するため、国民をあげてわたし一人に頼っていることが明らかである」〔951〕と確信したからである。

『希望の回想』は、三度目の逆境において書かれた。それはゴーリズムがまたも国民の声を見失い、また世界史的状況においてフランスが漂流を始めて生じた。この未完の回想録は既刊部分で三度目の復帰の道筋を示していない。いや、仮にド・ゴールが長命であったとしても、第二の回想録が前作のように逆境に陥ったみずからと祖国との救済劇を描けたかどうか疑わしい。なぜなら、第三の逆境は、ゴーリズムそのものに対する否（ノン）の声だったからである。

第5共和国大統領ド・ゴールは、二度目の任期中に、1968年5月危機に遭遇した。パリで学生デモが起き、ソルボンヌが占拠されても、大統領はルーマニア訪問の日程を変えず、5月19日、フランス全土がゼネストに入った。ド・ゴールが国民議会を解散して「民の声」を聞くと、ド・ゴール派は圧勝した。7月、8月に二度の核実験を行い、11月に大学改革に着手したド・ゴールは、年末に通貨危機に見舞われ、10カ国蔵相会議を開いてフラン防衛に努めた。だが、翌1969年4月27日、地方行

政制度改革を問うた国民投票で過半数を割りこむと、ド・ゴールは即日辞任し、後任をポンピドゥーに預けた。大学紛争もゼネストも通貨危機も、ド・ゴールにとっては、あるいはゴリズムというナショナリズムにとっては、従来の手法で切り抜ける障害にすぎなかったであろう。だが、「民の声は神の声」なら、新しい世界史的状况を見誤ったゴリズムは神慮から外れてしまったのである。

旧植民地の住民たちの国を過半とする国際社会において、中級の国はどのようにしてみずからを維持すべきか。いつの日か、また別の政治家が、逆境のさなかで回想録作者となり、ド・ゴールに反してヨーロッパ連邦の誕生を物語るかもしれない。それは明日のことではない。

(本論文は平成21年度成城大学特別研究助成を受けた「出来事と批評言説の変容—戦争・ナショナルアイデンティティ・文学」の成果報告である)

## 註

- 1) 本論ではプレイヤッド版を参照した。Charles de Gaulle: *Mémoires*, Gallimard, 2000 邦訳は、村上光彦・山崎庸一郎訳『ド・ゴール大戦回顧録』みすず書房、新装版全6巻、1999年を参照。朝日新聞社外報部訳『希望の回想』(第一部のみ)、1971年、は未見。
- 2) 原稿の状態については、プレイヤッド版の校訂者ギュイヤールの解説に詳しい。p.CXXXVIII
- 3) André Malraux: *Les chênes qu'on abat...*, Gallimard, 1971, p.34 新庄嘉章訳『倒された樫の木』新潮社、1971年
- 4) スタンレイ・ホフマン、天野恒雄訳『フランス現代史2 政治の芸術家ド・ゴール』白水社、1977年、14-15頁。訳書の第二章「偉大さへの意志」も興味深い。ホフマンがド・ゴールの回想録を論じた第一章、第三章の原書は次のものを参照した。Stanley Hoffmann: *Essais sur la France déclin ou renouveau?*, Seuil, 1974, pp.267-268 引用は天野訳を使わせていただいたが、直訳すれば、「甘んじることの正反対を意味する」となる。
- 5) *Mémoires*, p.909 以下、『希望の回想』原著の引用は本文中に算用数字で参照ページを〔909〕と記す。
- 6) 註(3)参照、p.52
- 7) *ibid.*, p.32 ホフマンは前掲訳書第二章の「私人ド・ゴールの誕生」「幼少年期」「ド・ゴールにおける影響」で、シャルルの人生について略述して

いる。

- 8) たとえば政治史家ルネ・レモンの入門書を参照。レモンは1958年2月8日、フランス空軍がチュニジア南部の村をアルジェリアの武装ゲリラが潜伏しているとして爆撃し、民間人の死傷者を出してしまい、すでに自治を約束していたチュニジアとの関係が悪化した事件、および4月末の市町村議会選挙による連立与党の非協力的な態度を5月危機の要因として重視する。もちろんこれは回想録作家ド・ゴールの説明とは異なる。René Rémond: *Le retour de de Gaulle*, Editions complex, Bruxelles, 1987 他に、中木康夫『フランス政治史』(中)(下)、未来社、1975-6年および渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』ナカニシヤ出版、1997年も参照した。
- 9) 現行憲法でなく第5共和制憲法第16条のこと。国家機構の危機的状況において共和国大統領は、「首相、両院議長、憲法審議会議長と公的に協議した後、必要な措置を行う」とある。
- 10) Roland Barthes: *Œuvres complètes*, t.1, Seuil, 1993, pp.831-2 塚本昌則訳『ロラン・バルト著作集4』みすず書房、2005年、を参照し、訳語を変えさせていただいた。その責任は引用者にある。
- 11) Bernard Frank: *Panoplie littéraire*, Flammarion, 1980, p.240 拙訳『ドリュ・ラ・ロシエル』水声社、1997年、の誤訳を改めた。
- 12) ドイツの無条件降伏の前にアルジェリアで武装蜂起を企てたとして国外追放されたメッサリ派とは異なり、アッパースは穏健派で「自由の宣言の友」を結成、自治共和国をめざした。